J・デューイにおける「批判的思考」の概念
―“How We Think”を中心に―

樋口直宏

一　はじめに

批判的思考（critical thinking）の教育は、アメリカを中心に初等教育から高等教育の各段階において、今日幅広く行われている。わが国においても、いわゆる「生きる力」の一つとして、自分で課題を見つけ問題を解決するといった自ら考える力が強調されており、問題点を見出したり、自分の考えを根拠をもとに吟味しながら論理的に主張する批判的思考の重要性は、今後ますます増大していくと思われる。

ところで、批判的思考という用語について、アメリカでその概念が定着したのは一九四〇年代以降のことである。しかし、critical thinking の用語自体はそれ以前も使われており、それは時に教育目標あるいは思考の研究において、特定の概念を説明する役割を担ってきた。その中でも、二〇世紀初期のアメリカ哲学界および教育界の代表的研究者であったデューイ（J. Dewey）が批判的思考を取り上げているのは、批判的思考の研究において注目すべき点である。(1)

デューイの思考に関する著作としては、“How We Think”が有名である。この研究においてデューイは、反省的思考（reflective thinking）という概念を提示して、思考の過程を明らかにしている。反省的思考およびその過程として示された五段階（局面）論が、教育研究の理論的基盤としてわが国においても取り入れられたことは、言うまでもない。だが“How We Think”においては、反省的思考とは別に、若干ではあるが批判的思考あるいはそれに関連する用語も用いられている。しかも、“How We Think”は一九一〇年に出された初版と一九三三年に出さ

れた改訂版とがあるが、批判的思考は一九一〇年版において多く用いられ、一九三三年版ではほとんど使用されなくなっている。

そこで本研究では、デューイにおいて批判的思考がどのような意味で用いられ、そこにはどのような特徴があるかを明らかにすることを目的とする。特に、㈠デューイの思考研究および反省的思考との関係において、批判的思考がどのように位置づくのか、および、㈡"How We Think"の一九一〇年版から一九三三年版への改訂に際して、批判的思考の概念にどのような変容が見られるのかという二点を中心に検討する。これらを通して、その後の批判的思考研究に、デューイの概念がどのように影響を及ぼしているかを考える手がかりとしたい。

この目的のために、本研究では次の方法を用いる。まず、検討にあたってはデューイの諸著作のうち"How We Think"の一九一〇年版および一九三三年版の二冊を直接の対象とする。使用するテキストは、一九一〇年版についてはDOVER社において一九九七年に刊行されたもの、また一九三三年版については"John Dewey The Later Works, 1925–1953"(Southern Illinois University Press 発行)の第八巻である[2]。その他の著作については、批判的思考に関連する部分のみを必要に応じて取り上げる。また、"How We Think"の一九三三年版については翻訳書があるので、他の参考文献とともに適宜参照する[3]。具体的な検討の手続きとしては、はじめに"How We Think"の一九一〇年版および一九三三年版の構成を比較しながら、どのような違いがあるかを検討する。その上で、批判的思考およびそれに関する用語がどこで用いられているかについて言及する。次に、指摘したそれぞれの批判的思考に関する記述を解釈しながら、デューイの言う批判的思考の意味およびその特徴について明らかにする。さらに、批判的思考の概念がどのように変わっていったのかおよびその理由について、"How We Think"以後の研究も含めて考察する。そして最後に、デューイ以後の批判的思考研究における概念と比較しながら、デューイにおける批判的思考の概念の特徴をまとめたい。

二　"How We Think"における批判的思考の記述

(一)　一九一〇年版および一九三三年版の構成

一九三三年版"How We Think"の「新版への序」の冒頭において、デューイは「あるテキストが『改訂』され

るということは、わずかな言語上の修正か、あるいは広範囲な書き換えを意味するであろう。ここに発表された“How We Think”の新版は、後者の種類の改訂である。それは、そのサブタイトルが示すように、“How We Think”の『再述』である。」[4]と述べている。この言葉からわかるように、デューイにとって一九一〇年版から一九三三年版への書き換えは、内容的に広範囲な書き換えという意識があった。実際に、一九一〇年版と一九三三年版との間においては、新たな章を追加したり、章の順序を入れ替えたり、さらには各節における項を明確に記述するなどの点で違いが見られる。この両版の比較については、デューイの著作集である“John Dewey The Later Works, 1925–1953”の第八巻において、一九三三年版“How We Think”の収録とともに、編集者であるサイモン（H. F. Simon）によってその相異がまとめられている。またわが国においては、松村や佐々木によって同様の研究が行われている[5]。ここでは、“How We Think”の構成を概観する意味も込めて、はじめに一九一〇年版の章立てを示しながら、それが一九三三年版ではどのように改訂されているかについて検討する。

一九一〇年版の“How We Think”は、三部一六章から構成されている。第一部は「思考訓練の問題」である。そこでは、「第一章　思考（thought）とは何か」、「第二章　思考訓練の必要性」、「第三章　思考訓練の素地」、「第四章　学校の条件と思考の訓練」、「第五章　精神訓練の手段と目的…心理学的および論理学的なもの」について考察されている。第二部は「論理的考察」である。これは、「第六章　思考の完全な活動の分析」、「第七章　組織的推理…帰納と演繹」、「第八章　判断…事実の解釈」、「第九章　意味…あるいは概念と理解」、「第一〇章　具体的、抽象的思考」、「第一一章　経験的、科学的思考」から成り立っている。さらに第三部は「思考の訓練」である。ここでは、「第一二章　身体活動と思考の訓練」、「第一三章　言語と思考の訓練」、「第一四章　精神の訓練における観察と情報」、「第一五章　復習と思考の訓練」、「第一六章　いくつかの一般的結論」について述べられている。

一方、一九三三年版においては同じく三部から成るが、章については三章増えて一九章である。その違いを順に述べると、まず第五章が第二部に回され、「反省的活動の過程と所産…心理学的過程と論理学的形式」と書き改められている。次に、一九一〇年版の第六章はほぼ全面的

に書き換えられて、「第六章　推理と検証の事例」および「第七章　反省的思考の分析」の二章に分けられる。また、一九一〇年版の第七章についても、「第一一章　組織的方法…データと証拠の制御」および「第一二章　組織的方法…推論および概念の制御」とに分けられるとともに、順序も変更された。一九一〇年版の第八章は、章の表題が「第八章　反省的活動における判断の位置」と改められている。第九章は一九三三年版では「第九章　理解…観念と意味」、「第一〇章　理解…概念と定義」に分けられている。さらに、一九一〇年版第一〇章は、第三部第一五章で「具体から抽象へ」という表題に書き換えられた。他の章については、章の番号が変わるだけで、表題についての変更はない。

このように、一九三三年版では特に第二部を中心に改訂が行われている。さらに、表現上大きく修正および加筆が行われた箇所を取り上げると、次のようになる。まず第一部では、一九三三年版第二章第二節「継続的な規制を必要とする心的傾向性」において、思考の態度について加筆されている。デューイによれば、人間はもともと誤った考え方や信念を受け入れやすい傾向があるので、正しい思考のための訓練が必要である。一九三三年版では、そのための思考の態度として、開かれた精神（open-mindedness）、真心（whole-heartedness）、責任の三つが必要であるとしたのである。また一九一〇年版第五章第一節「序…論理的（logical）の意味」は、一九三三年版では第二部において扱われるとともに、「第一節　形式的および実際的できごととしての思考」として新たに加筆されている。この両者はいずれも、心理的な思考と論理的な思考との違いについて説明しているが、一九三三年版では伝統的な三段論法を事例としながら、論理的な思考の意味を限定した点が特徴である。

第二部では、いわゆる反省的思考の五段階（steps）を扱った一九一〇年版第六章が大幅に書き換えられている。考察の対象として提示されている三つの事例（友人との待ち合わせ、船の舳先のポール、コップの泡）についての記述は同じだが、一九一〇年版ではすぐに五段階の分析に入るのに対して、一九三三年版では章をあらためて「第七章第一節　反省的活動の本質的機能」において説明される。そこに至る途中に、「第六章第二節　未知のことに対する推理」、「第三節　疑わしさから安定した状況への思考の動き」、「第七章第一節　事実と観念」の三つが挿入されている。これらの節においてデューイは、推理

や反省的思考の意味、さらには事実、データ、暗示、観念の関係について明らかにして、後に続く五局面（phases）を説明する際の前提としたのである。

一九一〇年版の第七章は、一九三三年版では第一一章と第一二章とに分けられたが、ここでは特に帰納と演繹についての叙述が後退している点が特徴である。すなわち、一九一〇年版では推理の方法として帰納と演繹が「第七章第一節　反省の二重の動き」として、あるいは帰納だけが「第二節　帰納的な動きの手引き」として取り上げられている。これに対して、一九三三年版では「第一一章第一節　事実と観念の慎重な検証としての方法」および「第二節　データの判断における方法の重要性」において、科学的方法の一部として帰納がとらえられる。演繹についても、一九一〇年版「第七章第四節　演繹的な動きの手引き」についての内容が削除され、一九三三年版では「第一二章第一節　科学的概念の価値」において演繹は概念の体系化という形で書き改めている。

第二部ではこの他に、一九三三年版第九章第三節「事物が意味を得ていく過程」において、意味と文脈の関係についての記述が書き加えられている。

第三部は一九一〇年版と一九三三年版とでそれほど違いはない。唯一大きく書き換えられているのは、一九一〇年版の「第一五章第一節　教授の形式的段階」が、一九三三年版では「第一八章第一節　復習についての誤った観念」、「第二節　復習の機能」、「第三節　復習の行為」となった点である。特に、一九一〇年版で述べられていたヘルバルト（派）の五段階教授法についての検討がなくなっている点は特徴的である。

（二）批判的思考の記述箇所

二つの“How We Think”において、批判的思考およびそれに関連する語はどのように記述されているだろうか。管見によれば、critical thinking という語は一九一〇年版に二か所見られる。また、critical に関連する語も含めると、一九一〇年版に七か所と一九三三年版に一か所の計八か所ある。ここではこれらがどのように記述されているかについて、順に示すことにする（引用ページは筆者の使用したテキストによる。）。

〈一九一〇年版〉

①第一章　思考とは何か　第四節　要約（一三頁）

「もし、思い浮かんだ暗示がすぐに受け入れられるので

あれば、我々は最低限の反省である無批判的思考(uncritical thinking)をしていることになる。ものごとを熟慮すること、あるいは反省することは、さらなる証拠や新しいデータを捜すことを意味するのであり、それは暗示を発展させ、また我々の言う証明もしくは不条理や関連のなさを明らかにすることになるであろう。」

②第三章　思考訓練の素地　前書き（二九頁）

「前章において我々は、訓練を通して、推理に関する生まれつきの能力を、批判的吟味(critical examination)および探究する習慣へと変えていく必要があることを考察した。」

③第六章　思考の完全な活動の分析（七三～七四頁）

「新しいものや異常な困難にぶつかった場合において、しかしながらその困難は、第一にショックとして、感情的な動揺として、あるいは予測できない、不思議な、奇妙な、おかしな(funny)、当惑した、多かれ少なかれあいまいな感情として現れがちである。そのような場合、何がトラブルなのかを明確にしたり、問題の固有な特徴を明らかにするために、熟慮して判断されるような観察が必要である。大部分において、この段階の有無が、適切な反省もしくは保護された(safeguarded)批判的推理(critical inference)と、制御されていない思考(uncontrolled thinking)との間の違いを作るのである。」

④第六章　思考の完全な活動の分析（七四頁）

「批判的思考(critical thinking)の本質は、留保された判断である。そしてこの留保の本質は、その解決への試みを進める前に、問題の性質を決定するための探究である。これは他のこと以上に、単なる推理を検証された(tested)推理に、暗示された結論を証明(proof)へと変形していく。」

⑤第七章　組織的推理…帰納と演繹　第一節　反省の二重の動き（八〇頁）

「しかしながら、意味から、もしくは意味へのこの二重の動きは、偶然の(casual)無批判的なやり方(uncritical way)においてか、あるいは注意深い規制された様式(manner)においておこるであろう。」

⑥第七章　組織的推理…帰納と演繹　第一節　反省の二

重の動き（八二頁）

「帰納的な動きは、結合している（binding）原理の発見に向けられている。演繹的な動きは、その検証―孤立している項目を、統一した経験へと解釈する能力を基盤として、実証し、証明し、修正すること―に向けられている。我々がこれらの過程のそれぞれを、もう一方に照らして処理する（conduct）限り、我々は妥当な発見あるいは実証された批判的思考（critical thinking）を得ることができる。」

⑦第八章　判断…事実の解釈　第二節　観念の起源と性質（一〇七～一〇八頁）

「不明瞭な状況における何かが、その意味として他の何かを暗示する。もし、この意味がすぐに受け入れられるのであれば、そこには反省的思考も真の（genuine）判断もない。思考は無批判的に（uncritically）短縮され、それに伴うあらゆる危険とともに、教条的（dogmatic）な信念が発生する。」

〈一九三三年版〉

⑧第一章　思考とは何か　第四節　要約（一一三頁）

「しかしながら、困惑の状態や暗示がおこるためのこれまでの経験があるかもしれないが、それでも思考は反省的である必要はない。というのは、その人は彼におこる観念（idea）について十分批判的（critical）でないかもしれないからである。彼はそれがもとづいている根拠をよく考えることなしに、結論に飛躍するかもしれない。彼は捜索や探究の行為を先走ったり、不当に短縮するかもしれない。彼は精神的な怠惰、無気力、決定された何かを得ようとする気持ちのために、心に浮かんだ最初の『答え』や解決を採用するかもしれない。」

このように、批判的思考および関連する用語は一九一〇年版を中心に見ることができる。そこでこれらを基礎資料として、デューイにおける批判的思考の意味およびその変化について考察する。

三　デューイにおける批判的思考の意味とその変化

（一）批判的思考の意味およびその特徴

これまで引用した箇所から、デューイにおける批判的

思考の特徴を示すと、次の三点にまとめることができる。

（ア）暗示および反省的思考との関係

第一は、暗示（suggestion）および反省的思考と、批判的思考との関係についてである。デューイにとって暗示とは、「何かをヒョイと思いつくこと」[6]に例えられる。これについてデューイは、暖かい日に道を歩いている人の例をあげて説明する。空気が冷たくなってきたのを感じて空を見上げると暗い雲を見つけ、彼は雨が降ることを予想して歩を早める。「歩くことは、活動の一つの方向である。見ることや気づくことは、活動の別の様式である。しかしながら、雨が降るだろうという可能性がいくぶん暗示される。」[7]このように、異なる様式から雨が降るだろうという新たな予測を思いつくのが、ここでいう暗示の意味である。

また反省的思考とは、我々が直接知覚したことや、あるいは心に浮かんだことを言うのではなく、「ある信念に対する根拠や基盤が慎重に求められ、その信念を補強するための適切さが検証される」[8]過程のことである。それは、「疑い、ためらい、困惑、心的困難の状態」から始まり、「疑いを解決し、困惑を安定させ処理するような資料を見出すための、調査、捜索、探究の行為」[9]を伴う。デューイは、我々の頭をよぎることすべてを思考ととらえる一方で、根拠にもとづく探究という意味で反省的思考を限定して定義したのである。

暗示と反省的思考との間には、必然的関係はない。デューイは、同じ雲を見た人が人間の姿や顔を思い浮かべる場合を例にあげて、次のように述べている。「我々は、雲によって暗示される顔のことを信じない。すなわち、我々はそれが事実である可能性をまったく考えない。そこには反省的思考はない。」[10]雲から人間の姿や顔を思い浮かべるのは、デューイの言う空想（fancy）であり反省的思考ではないが、そこにも暗示はある。すなわち、暗示がおこると必ず反省的思考が行われるというわけではないのである。

では、これらの暗示および反省的思考との関係において、批判的思考はどのような意味を持っているだろうか。一つは、暗示をすぐに受け入れたり、飛躍して結論を出さないということである。デューイは、思い浮かんだ暗示をすぐに受け入れることを「無批判的思考（uncritical thinking）」[11]と呼ぶとともに、思考によって暗示される意味（meaning）を無批判的（uncritically）に受け入れるこ

とが、教条的、ドグマ的な信念につながる危険性を指摘する[12]。思考は、与えられた条件や事実から、確かめられていない他のことを見出し意味づけるという機能を持つという点で重要である。だがその際、過去の経験やドグマ、自分の興味や感情の生起が影響することによって、誤りを起こす可能性にさらされている[13]。そこで、訓練を通して批判的吟味（critical examination）や探究の習慣を持つことを主張したのである[14]。ここでは批判的思考という語は直接使われていないが、考えを無条件に取り入れたり、思いついた暗示をそのまま結論とすることがないという点で、「批判的」という語の本来の意味が表れていると言えるだろう。

もう一つは、批判的思考は反省的思考の条件として位置づけられるということである。暗示をすぐに受け入れる無批判的思考を、デューイは「最低限の反省（the minimum of reflection）」と呼んでいる[15]。だがデューイにとって、暗示される意味がすぐに受け入れられるのであれば、「そこには反省的思考も真の判断もない」[16]のである。思い浮かんだ暗示を吟味し、もっとも適切な結論のみを受け入れるという過程こそが反省的思考である。その意味では批判的思考は、反省的思考とほぼ同義である。また、一九三三年版の“How We Think”においては、暗示によっておこる観念（idea）について十分批判的でない時には、困惑の状態や暗示がおこるためのこれまでの経験があっても、思考は反省的である必要はないと述べている[17]。このように反省的思考においては、批判的に思考する姿勢が要求されているのである。

（イ）反省的思考の五段階論と批判的思考との関係

第二の特徴は、反省的思考の五段階論と批判的思考との関係についてである。これは一九一〇年版において、㈠感じられた困難、㈡困難の位置と定義づけ、㈢可能な解決の暗示、㈣推論による暗示の態度の発達、㈤受け入れか拒絶か、すなわち信じるか信じないかについての結論を導くさらなる観察と実験、として示されている。この中で批判的思考に関する記述があるのは、㈡困難の位置と定義づけのところである。そこではまず、制御されていない思考と比較されるものとして、批判的推理（critical inference）がある。それは、「問題の固有な特徴を明らかにするために、熟慮して判断されるような必要な観察」[18]を意味する。すなわち、困難を感じてそれを解決しようとする過程において、何が、あるいはどのよ

うに困難なのかを明確にすることが批判的推理の本質である。

このことを一層明確にしたのが、「批判的思考の本質は、留保された判断である。そしてこの留保の本質は、その解決への試みを進める前に、問題の性質を決定するための探究である。」[19]という定義である。ここでは、批判的思考が判断を留保することと定義されている。それはまた、何が問題かを明らかにするという性質を持つ。このように、暗示をすぐには受け入れないという姿勢とともに、問題を明確にするための判断の留保という特徴を見出すことができる。

（ウ）帰納、演繹との関係

批判的思考の意味を考える上での第三の特徴として、帰納および演繹との関係をあげることができる。まずデューイは、推理（inference）と推論（reasoning）とを区別することから始める。それによれば、推理および推論は、何が困難なのかを決定するという最初の段階から、仮説として得られた結論の真偽を検証とするという最後に至るまでの中間における精神的な様相としてある。そして推理が、説明や解決への暗示を意味するのに対して、推論は、暗示の態度および暗示されたものの発展を意味する[20]。すなわち、問題を把握して解決に向けての暗示が生じる際に推理が関係し、それを受けてその暗示の確かさを検証することと関わるのが推論であると区分したのである。これは、反省的思考の五段階で言えば第三段階および第四段階にあたると言ってよいだろう。

帰納および演繹は、この推理および推論の方法にあたるものである。反省的思考においては、事実もしくはデータから、意味および観念を導き出す際、部分的あるいは混乱したデータから暗示された包括的な状況への動きと、意味として暗示された全体から、さらなる新しい事実と結びつくような特定の事実への動きという「二重の動き（double movement）」が相互作用しているとデューイは考えた。この前者が帰納であり、後者が演繹である[21]。推理および推論と関係させれば、推理が帰納と、推論が演繹と対応することになる。ただし推理と推論とを区分することについては、思考過程を考える上でも、また“How We Think”における用語の使用という点からもデューイにおいて不明確なところがあるので、この対応は便宜上のものである。

さて、帰納および演繹との関係における批判的思考の

意味であるが、デューイは事実と意味との間の二重の動きには、無批判的なやり方（uncritical way）と、注意深い規制された様式（manner）の二つのやり方があるとしている。[22] 逆に言えば、事実と意味との間を思慮深い計画において関係づけることが、「批判的」の意味であると言うことができるだろう。また、帰納および演繹に限定して、「我々がこれらの過程のそれぞれを、もう一方に照らして処理する（conduct）限り、我々は妥当な発見あるいは批判的思考を得ることができる。」[23]と述べている。すなわち、帰納および演繹の両面を見すえた思考が批判的思考であると意味づけられる。それは、判断の留保とは異なる、批判的思考のもう一つの特徴である。

（二）「批判的思考」の使用上の変化

"How We Think" が一九一〇年版と一九三三年版との間において、特定の部分を中心に改訂されたのは先に述べた通りである。それとともに批判的思考についての記述も、一九三三年版では一か所 critical という語が使用されている以外、すべて書き換えられている。一九一〇年版で見られた七か所の批判的思考に関する意味および表現は、一九三三年版ではどのように変化しているであろうか。ここではあらためて二冊を比較しながら、前節の三つの観点に即してその内容を考察したい。

まず、第一の特徴である暗示および反省的思考との関係についてであるが、一九一〇年版「第一章 思考とは何か 第四節 要約」において、暗示をすぐに受け入れることを「無批判的思考（uncritical thinking）」と呼んでいる箇所がある。[24] これは一九三三年版にも同じ章および節がある。ただしそこでは、根拠をよく考えることなしに結論に飛躍することが、「十分批判的（critical）でない」[25]と述べられており、その表現には違いがある。

また、一九一〇年版「第三章 思考訓練の素地」の前書きでは、自分の感情やドグマに影響されないという意味で「批判的吟味（critical examination）」という語が用いられた。[26] この部分も一九三三年版に同じ章および節があるが、前書きの文章は全面的に書き換えられている。内容的には、思考の訓練において個人の持つ生来の力を伸ばすことの重要性について触れられたという点で、両者の間に大きな違いはないが、一九三三年版では「批判的吟味」という言葉は消え、精神の教育によって得られる価値（value）および障害（obstacle）についての指摘にとどまっている。

さらに、一九一〇年版「第八章 判断…事実の解釈 第二節 観念の起源と性質」では、暗示および意味をすぐに受け入れることは「無批判的（uncritically）」であり、それは反省的思考ではないことが述べられる[27]。この部分は一九三三年版では「第九章第一節 暗示および推測としての観念」において同様の記述がある。そこでは、暗示と意味および観念、さらには判断（judgment）との関係が説明される。すなわち、デューイは困難な状況から意味が暗示され、それが結論として留保され吟味されることによって観念が生じると考えた。そしてこの観念を判断の一つの要因とするとともに、その過程での留保および吟味が判断に不可欠なものと位置づけたのである[28]。しかしここでも、「我々は意味を現実として受け入れるよりもむしろ、それを可能性として留保する時がある」[29]という記述があっても、それをcriticalという言葉で表してはいない。

次に、第二の特徴である反省的思考の五段階論との関係についてであるが、一九三三年版では五局面（phase）として、㈠暗示（suggestion）、㈡知性化（intellectualization）、㈢仮説（hypothesis）、㈣推論（reasoning）、㈤検証（testing）のように書き換えられている。特に、第一の局面である「暗示」が、困難や問題を感じることに限定されるだけでなく、ある行為を続けるうえで心に思い浮かぶことという意味で考えられているのは、一九一〇年版とは異なる点である。またこの中で、批判的思考と関わりが深いのは、第二局面の「困難の位置と定義」あるいは「知性化」である。そこでの内容は、両者とも困難および問題点がはっきりするという特徴を持つ点で、共通のものである。だが、一九一〇年版は「批判的推理（critical inference）」および留保された判断や探究という意味で「批判的思考」の用語が使われているのに対して、一九三三年版では「困難がいわば全体として波及しながら、状況全体を通して広がっているような、面倒な、困惑した、やっかいな状況がある」[30]といった類似の記述があるにもかかわらず、それを「批判的思考」とは呼んでいない。こうして、反省的思考の五段階論においても批判的思考という語は使用されなくなっているのである。

第三の特徴である帰納、演繹との関係については、帰納および演繹という概念そのものが一九三三年版では中心的項目からはずれている。一九一〇年版において、「第七章第一節 反省の二重の動き」、「第二節 帰納的な動きの手引き」および「第四節 演繹的な動きの手引き」と

して取り上げられていた帰納と演繹が、一九三三年版では第一一章および第一二章において、科学的方法および概念として扱われていることは、先に述べた通りである。ここで言う科学的方法とは、経験的方法に対比されるものであり、例えば医師が患者のチフスを診断する際に性急な結論を下さずにさまざまな可能性を考えることや、得られた結論を他の事例に照らして適合するかを検証することがこれにあたる。[31] この前者は帰納であり、後者は演繹であると言えるが、帰納および演繹の両面を見すえた思考という特徴を持った「批判的思考（critical thinking）」の用語は、「無批判的なやり方（uncritical way）」という表現とともに一九三三年版では書かれていない。

このように一九一〇年版においては何度か使用され、一定の意味も付与されていた批判的思考に関する用語は、一九三三年版ではそのほとんどが使用されなくなった。特に、内容的には両者においてほとんど同じであっても、批判的思考が用語として使用されなくなったのは、そこにデューイの何らかの意図が働いていたとも考えられる。

この点に関して、佐々木は質的思考理論の観点から次のように述べている。

「もし私の仮説が正しければ、一九一〇年版には、質的思考理論と呼べるものは登場せず、一九三三年版にはそれが取り入れられているに違いない、と思うのである。（中略）私の推測では、この書物は思考のプロセスを真正面から取りあげて論じた書物であるから、思考理論を質的思考理論に発展させた後では、デューイはどうしても書き換えてみたかったに違いないのである。」[32]

すなわち、佐々木によればデューイの思考理論の特徴は、「『質』があたかもキャンバス一杯に広がってきて場面を染め、これに統一感をもたらす」[33]といった質的思考にある。そして“How We Think”においては、それは一九三三年版の改訂によって明確にされたのである。[34]

そうだとすれば、批判的思考が用語として使用されなくなったのは、質的思考理論の登場に影響を受けたためであるということは、十分考えられる。例えば状況の質という考え方においては、「批判的」という意味を、暗示をそのまま受け入れなかったり、判断を留保するという意味で用いるのがふさわしくないとする考えがその一つである。また、反省的思考と批判的思考とを区別しない方がよいと判断したとも考えられる。さらには、帰納と演繹という考えを後退させることによって、それと関連

の深い批判的思考という概念を使用するのを見合わせたということもあり得よう。デューイが批判的思考を使用しなくなったことが意図的であるかどうかも含めて、これらの点は推測の域を出ない。そこで、「批判」がどのような意味で用いられているのか、“How We Think” 以外の文献においてさらに検討を進める。

四　“Experience and Nature” における「批判（criticism）」の意味

デューイが「批判」という語について直接に言及しているのは、“Experience and Nature”（『経験と自然』）においてである。「存在、価値、批判（Existence, Value and Criticism）」という章のタイトルからもわかるように、この書においてデューイは、価値について考察する中で批判の意味を明らかにする[35]。

「価値は価値であり、事物はある本質的な質を直接に持っている。したがって、価値としてのそれらについて言われることは何もなく、それらはあるがままである。それらについて言うことのできるのは、それらの発生条件とそれが引き起こす結果についてのことである。」[36]という記述は、デューイの価値についての考え方の特徴を表している。すなわち、ある事物に関してよいものであるとか興味があるといった価値は本質的なものであるので、それについては何も考えることはできない。しかしその一方で、我々は価値を引き起こす条件と、それがどのような結果を引き起こすかについては考えることができる。例えば、「歯痛がおさまることに価値のある人は、その事実によって歯科に行くことやその他のあらゆる達成の手段に価値を見出す」[37]という例においては、歯科に行くことが条件あるいは手段であり、歯痛がおさまることが結果および達成である。この条件と結果の関係において、歯科に行くことも価値あることとなるのである。

このような関係や条件について考える手続きのことを、デューイは批判（criticism）と呼ぶ。デューイは、鑑賞（appreciation）や趣味（taste）と区別しながら、批判を次のように説明する。

「批判は識別力のある（discriminating）判断であり、注意深い評価である。そして判断は、識別の内容（subject-matter）が善や価値に関する時には、いつでも適切に批判と呼ばれる。」[38]

「批判はどのような種類の価値があるのかを見ようと専

念する時に、いつでもおこるものである。すなわちそれは、価値対象を熱心に受け入れたりそれに夢中になるかわりに、その価値についてのわずかの疑問さえ取り上げたり、その将来の可能性の一時的な評価によって我々の感覚を修正する時におこるのである。」[39]

この二つの記述から、デューイの言う「批判」について次のような特徴が見出せよう。

第一は、批判とは判断および評価といった側面を持つ。特にその内容は、善や価値に関することである。ある事物に対して善や価値を見出す時、その条件や結果をデューイは重視した。その事物が価値があるかないかを、さらに分析的に判断したのである。そのような判断や評価は印象や思いこみによって評価されたり、あるいはそれがなぜ価値があるかについて理解しにくい場合においては、重要な要素である。

第二は、どのような価値であるのかを識別するという点である。デューイは「善の所有と享受（enjoyment）は少しずつ、かつ必然的に評価へと進んでいく。」と述べ、この過程を知的探究（intelligent inquiry）[40]としてとらえる。すなわちある経験は、最初の未成熟なうちは満足であり楽しみである。しかし、それはしだいに反省によって、問題へと変化する。それが、価値の条件や結果についての考察、すなわち批判となっていくのである。デューイはこれを、「鑑賞から批判への移行」[41]と呼び、両者の区別に用いている。そしてこれらの批判を通して、「さらに永続的かつ広範囲な価値を制定し、持続する」[42]ことを目指したのである。

第三は、価値に関する疑問や、自分の感覚の修正という点である。これは、批判のきっかけ（契機）とも言えるべきことがらである。これまで検討したように、デューイは価値を永遠かつ普遍的なものとは見ていない。それは、経験による条件および結果によって決定されるものである。それゆえ、ある価値に対して疑問を抱いたり、自分の持っている価値さえ修正することもある。しかもそれは、いつでも生起することである。このような疑問および修正を行うことが、デューイの「批判」の特徴の一つである。

それでは以上のような「批判」の意味は、批判的思考における「批判」と比較して、どのような共通点があるだろうか。もっとも大きな特徴は、判断および評価を中心にすえているという点であろう。批判的思考の特徴の一つは、留保された判断であった。善や価値の問題に関

しても、そこでの判断や評価は、ともすると安易に受け入れられてしまいがちな価値を、条件や結果を分析することによっていっそうその価値を明確にするという点で、留保された判断と共通する意味合いが強い。さらに、判断において何を考えればよいかについての問題点をはっきりさせることも、両者に共通して見られる点である。

またもう一つの特徴は、「批判」という語感にもっとも近い、疑いを持つということである。教条的、ドグマ的な信念を持つことを避けるために、他者あるいは自分自身の考えにさえ疑いを持つという姿勢は、批判的思考の重要な要素である。この点については、"Experience and Nature"においても価値に関する疑問や自分の感覚の修正という点で、批判の特徴の一つとして指摘されている。これはいわば、批判的な態度とでもいうべきものであり、批判や評価の手続き的な面だけでなく、このような態度的な面においても両者の共通点が見出されるのである。"Experience and Nature"における批判の意味は、価値の問題に限定されてはいるが、そのことをふまえた上でも、批判の意味の特徴をいっそう明らかにすることができるだろう。それはまた、この書が発行された一九二五年の時点においても、デューイが「批判」という語を積極的に使用していたことの表れでもある。

五　おわりに

デューイにおいては、反省的思考についての理論が大きな影響を与えたために、批判的思考についてはそれほど強調されることはなかった。しかし、これまで検討してきたようにそこには、㈠暗示をすぐに受け入れたり、結論に飛躍して到達しない、㈡判断を留保して問題が何かを明確にする、㈢帰納および演繹の両面を見通しながら推理する、といった特徴があった。

ところで、デューイ以後の批判的思考研究においても、多くの定義が示されている。これについて、児童・生徒の批判的思考能力を測定するためのテストをはじめて開発したグレイサー（E. Glaser）は、批判的思考を、証拠や結論に照らしながら信念や知識を吟味する能力と定義した[43]。また一九五〇年代においては、例えばスミス（B. O. Smith）は「ある言明の意味することを明らかにし、それを受け入れるか拒絶するかを決定すること」[44]と述べている。さらに一九六〇年代から活躍し、今日においてもしばしば引用されるエニス（R. H. Ennis）の定義は、

「何を信じ、何をするかの決定に焦点をあてた、合理的な反省的思考」[45]である。これらは、証拠の活用および結論に至るまでの吟味、言明の意味の明確化、受け入れまたは拒絶の決定などの点で、デューイの定義と重なり合う部分が多い。

またわが国においても、例えば楠見は「自分の推論過程を意識的に吟味する反省的な思考であり、何を信じ、主張し、行動するかの決定に焦点をあてた思考」[46]と定義する。さらに、批判的思考という語を直接用いるわけではないが、苅谷は自らのアメリカ留学の経験をふまえて、「ありきたりの常識や紋切り型の考え方にとらわれずに、ものごとを考えていく方法」および「複数の視点を自由に行き来することで、一つの視点にとらわれない相対化の思考法」を「複眼思考」と呼んで、今日におけるその指導の重要性を主張している[47]。このようにデューイの理論は、今日の、またアメリカとともにわが国における批判的思考論に影響を与えているということができる。

だが、一九三三年版の“How We Think”においては、デューイは「批判的思考」の語を使用しなくなった。そもそもデューイが批判的思考という言葉をどれほど意識して使用していたのか、あるいはなんらかの理由から意図的に批判的思考の用語を用いなくなったのかは定かではないが、「批判」の意味自体を多様に定義していたことについても本研究では考察した。

デューイの批判的思考についての言及は、本研究で取り上げた文献以外にも見ることができる。そこでは、批判的思考の意味や概念の検討よりも、社会および教育に関する考察の中で、児童・生徒さらには市民に対して批判的思考を育成することの重要性を中心に論じている。例えば、“The Teacher and His World”における、マスコミの報道に対して批判的な識別力をつけることの強調や、“Education as Politics”における、政治の問題に対して批判的な眼を持つように教育すべきであるという主張がそれである[48]。これらの検討を含めて、デューイの思想全体において批判的思考がどのように位置づけられているのかをさらに詳しく検討することが、今後の課題である。

注

(1) アメリカの批判的思考研究においてデューイに言及している文献として、例えば次のものがある。

Norris, S. P. (1992). *The Generalizability of Critical Thinking* Teachers College Press.
Presseisen, B. Z. (1986). *Critical Thinking and Thinking Skills.* ERIC (ED268536).

(2) Dewey, J. (1910). *How We Think.* DOVER.
Boydston, J. A. (1986). *John Dewey The Later Works,* 1925–1953, Volume 8:1933. Southern Illinois University Press.

(3) ジョン・デューイー（植田清次訳）．（一九五〇）．『思考の方法』．春秋社．

(4) Dewey, J. (1933). "How We Think." in *John Dewey The Later Works,* 1925–1953, Volume 8:1933, edited by J. A. Boydston, p. 107.

(5) Simon, H. F. (1986). "Summary of Substantive Revisions in the 1933 How We Think." in *John Dewey The Later Works,* Volume 8, op. cit., pp. 397–414.
松村将（一九六七）．「『思考の方法』新・旧版の比較」．『日本デューイ学会紀要』、第八号、四七～五四頁．
佐々木俊介（一九八七）．「新・旧 How We Think の比較考察—質的思考理論から見た—」．『日本デューイ学会紀要』、第二八号、一五～二〇頁．
佐々木俊介（一九九八）．「続・新旧 How We Think の比較考察—質的思考理論から見た—」．『教育学研究集録』、第二二集、筑波大学大学院教育学研究科、一五～二〇頁．

(6) 佐々木俊介（一九七二）．「探究の論理と授業の論理」、冨田竹三郎（編著）．『現代の教授理論』、協同出版、一三九～一六九頁．

(7) Dewey, J. (1910). *How We Think.* op. cit., p. 7.
Dewey, J. (1933). "How We Think." op. cit., p. 118.

(8) Dewey, J. (1910). *How We Think.* op. cit., pp. 1–2.

(9) Dewey, J. (1933). "How We Think." op. cit., p. 121.

(10) Dewey, J. (1910). *How We Think.* ibid., p. 7.
Dewey, J. (1933). "How We Think." ibid., p. 119.

(11) Dewey, J. (1910). *How We Think.* ibid., p. 13.

(12) ibid., p. 108.

(13) ibid., p. 26.

(14) ibid., p. 29.

(15) ibid., p. 13.

(16) ibid., p. 108.

(17) Dewey, J. (1933). "How We Think." op. cit., p. 123.

(18) Dewey, J. (1910). *How We Think.* op. cit., p. 74.
(19) ibid.
(20) ibid., p. 77.
(21) ibid., pp. 79–80.
(22) ibid., p. 80.
(23) ibid., p. 82.
(24) ibid., p. 13.
(25) Dewey, J. (1933). "How We Think." op. cit., p.123.
(26) Dewey, J. (1910). *How We Think.* op. cit., p. 29.
(27) ibid., p. 108.
(28) Dewey, J. (1933). "How We Think." op. cit., pp. 221–222.
(29) ibid., p. 221.
(30) ibid., p. 201.
(31) ibid., p. 252, p. 263.
(32) 佐々木俊介（一九八七）：「新・旧 How We Think の比較考察—質的思考理論から見た—」：前掲書、一五頁、
(33) 同上書、一六頁、
(34) 質的思考理論を考察した佐々木の研究については、次の文献がある。
佐々木俊介（一九六四）：「質的思考理論における質の性格」：『日本デューイ学会紀要』、第五号、二四～三〇頁、
佐々木俊介（一九六五）：「質的思考と自然科学」：『日本デューイ学会紀要』、第六号、四二～四七頁、
(35) この書については、従来の翻訳の他に、最近次の翻訳書が刊行された。
河村望（訳）（一九九七）：『経験と自然（デューイ＝ミード著作集四）』：人間の科学社：
また、価値と批判について考察した研究には、次の文献がある。
木下涼一（一九八五）：『デューイ教育学への接近』：明治図書：特に、第二章第三節「感得と批判」（六〇～六四頁）：
峰島旭雄（一九七三）：「デューイにおける価値の概念—『経験と自然』第十章を手がかりとして—」：『日本デューイ学会紀要』、第一四号、一二一～一二五頁、
斎藤勉（一九八〇）：『デューイの教育的価値論』：福村出版：
(36) Dewey, J. (1925). "Experience and Nature." in *John Dewey The Later Works,* 1925–1953, Volume 1:1925, edited by J. A. Boydston, p. 297.

(37) ibid.
(38) ibid., p. 298.
(39) ibid., p. 299.
(40) ibid., p. 298.
(41) ibid.
(42) ibid., p. 302.
(43) Glaser, E. (1941). *An Experiment in the Development of Critical Thinking* AMS Press, p. 6.
(44) Smith, B. O. (1953). "The Improvement of Critical Thinking." *Progressive Education*, 30(5), p. 130.
(45) Ennis, R. H. (1987). "A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities." in *Teaching Thinking Skills: Theory and Practice*, edited by Baron, J. B. and Sternberg, R. J.; W. H. Freeman and Company, p. 10.
(46) 楠見孝（一九九六）「帰納的推論と批判的思考」、市川伸一（編）『認知心理学』第四巻、東京大学出版会、五一頁、
(47) 苅谷剛彦（一九九六）『知的複眼思考法』、講談社、一七頁、
(48) Dewey, J. (1935). "The Teacher and His World." in J. Dewey (1946). *Problems of Men*. Philosophical Library, pp. 70–82.（杉浦宏、田浦武雄（編訳）（一九七六）『人間の問題』、明治図書、七五～八六頁、）

Dewey, J. (1922). "Education as Politics." in J. Ratner (ed.) (1940). *Education Today*. G. P. Putnam's Sons, pp. 157–163.（杉浦宏、石田理（訳）（一九七四）『今日の教育』、明治図書、一〇〇～一〇六頁、）

また、この点について「教養」という観点から検討した研究として、次の文献がある。

小柳正司（一九八〇）「J・デューイの『教養（Culture）』論—Industrialism と新しい『教養』論—」、『日本デューイ学会紀要』、第二一号、七～一二頁、